



重症児者地域福祉づくりのなかで考えたこと(補充資料)

遠藤, 六朗

(Citation)

日本特殊教育学会第56回大会(2018大阪大会) 自主シンポジウム1-18 糸賀一雄の「最後の講義：愛と共感の教育」を読み解く

(Issue Date)

2018-09-22

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006482>



平成に入って、滋賀県で養護学校高等部卒業後の重症心身障がい者の通所づくりに関わりました。そのなかで、糸賀先生の著作を再度読み返してみたことがありました。

レジュメはそこから学んだことを示したものです。糸賀の生き方をとらえ、3点ばかりの視点を提示しています。

① 糸賀の生き方として、「悩める者は学びし者」、

① 「自立を求めて関係を創る」 自立＝自己実現

② 生命的表現としての共感

③ 関わることで見えてくる 「無財の七施」

0. 「悩める者は学びし者」

相馬先生のことを書いている箇所 ※相馬勇・正木正（マサシ）共著「教育的真実の探求」（1958 黎明書房）あり。

「この子どもたちが本当に置き去りにされてる、ほったらかされてる、それを見るに見かねる気持なんだ、そのようなことから出発しておるんですね。

その気持なんてものは人間ですよ。実に人間そのものですね。だれでもそんな気持はありますわねえ—しいたげられている人を見たら、この野郎、だれがこんな気の毒な可哀そうな目にあわせたのか、というのがわたしたち万人共通の気持ですよ。」

外界から何かを受け、心が揺れること＝感情、その揺れ動くことそのものを「経験」ともいう。

1. 「この子らを世の光に」⇒「自立を求めて関係を創る」 右図参照

「この子ら」、抽象的ではなく、「顔」を持った一人ひとりの生。

重症心身障がいのある人とは、自己実現（自立）するには他者と関わるほかなき存在。そこで、他者同士が連携し関係を創らないと、重症心身障がいのある人の「生」を支えられない。そこに共同が生まれる。そして、その関係のなかで、「その人」性が立ち上がる。具体的な、それぞれの「個」としての「顔」をもった「その人」が立ち上がる。この子らの自己実現、そして、社会（「世」）の共生。

2. 「生命即共感」 人間関係のもっとも深いところ（いのち）からのつながり＝共感 右図参照

「世界に、ただ投げ出されている存在」 つまり、〈からだ〉、〈いのち〉。その体、身体、生命そのものが共感そのものではないか。

「心身障害とか、精神薄弱とかいわれる人々とわたしたちとが、実は根が一つなんだ、本当に発達観から見て根っ子が一つだという共感の世界を一理屈のうえでもせめて共感の世界というものの根拠があることを、わたしたちは知りたいと思います。」

3. 「関わる」ことが原点 重症心身障がいのある人との関わり、関わることから始まる

人と生まれて人間となる

共感の世界

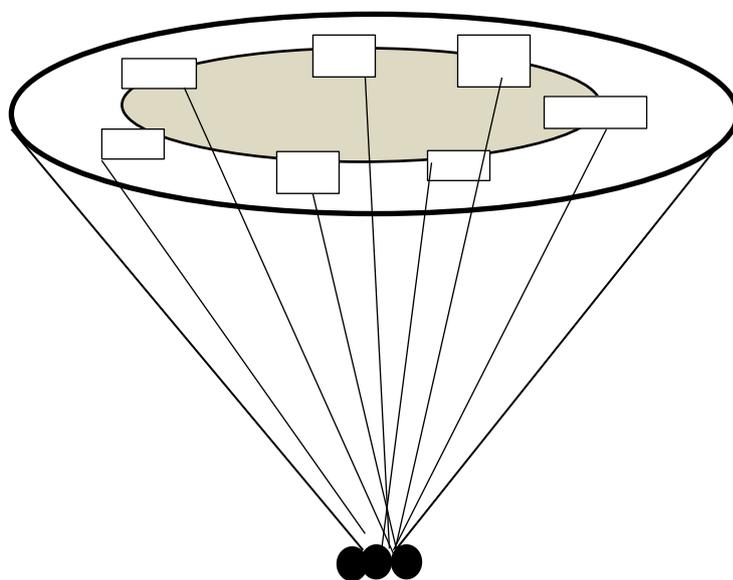
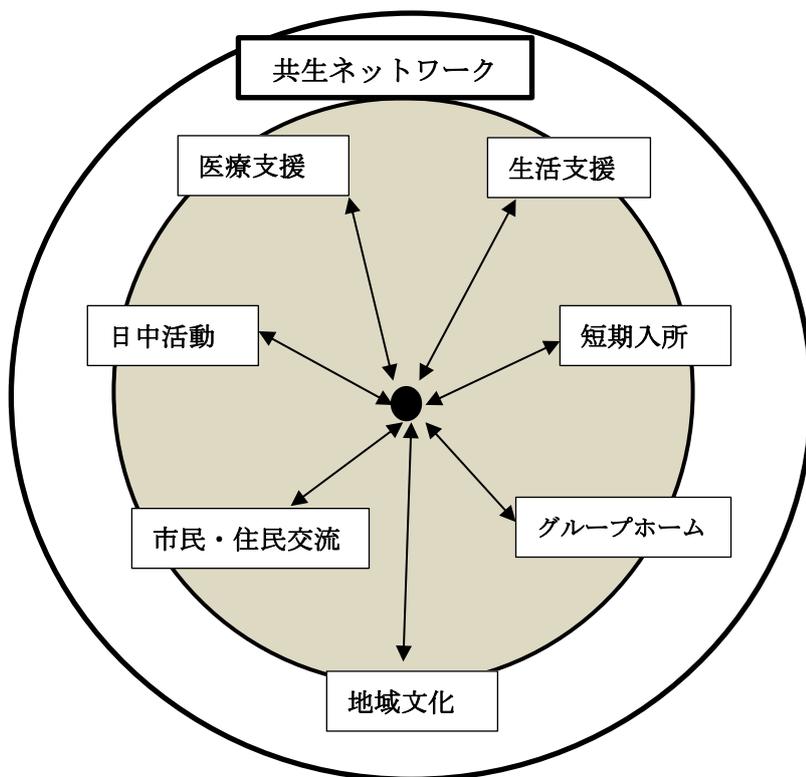
愛の育ち

・・・

「無財の七施」 人間関係の原点 誰もが何か一つは持っている。

イメージ図

● 個を表現



人間関係の深いところでのつながり（糸賀と共に行った 岡崎英彦の言葉）

生命=共感